



埼玉県のマスコット コハトン

# Lib. Letter

2012 Spring [3～5月]季刊

平成24年2月25日 通巻 第27号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館

<https://www.lib.pref.saitama.jp/> Tel 048-523-6291.

## 中世の歴史書に見る

# 平清盛と源平合戦

「此の一門にあらざらむ人は皆人非人なるべし」(『平家物語 巻一』より)といわれ、栄華を極めた平氏。武家として初めて太政大臣まで昇りつめ、平氏の時代を築き上げた平清盛は、歴史書の中にどのように記されていたのでしょうか。

今回は、平清盛と、彼が生きた時代の記録として残された中世の歴史書に関する資料を集めました。

## 1 中世の史料

平清盛が生きた、院政期の時代を知るための史料や平清盛について伝えているまとまった史料は、多くありません。清盛を知る史料としては、『平家物語』が存在しますが、物語ゆえ、信憑性にかける部分が多々あるようです。

次に紹介する『公卿補任』は、清盛がどのように出世を遂げていったのか、その足跡を知るうえで、基本的な史料となります。

### ◆公卿補任【くぎょうぶにん】

国の初めから明治元年(1868)までの、公卿の官員録で、編者は不明です。

内容は、大臣・大中納言・参議などいわゆる公卿といわれる人物を、序列順に位階・姓名を記したものです。『公卿補任』に載った最初の箇所には、本人の父母や、公卿になるまでの官歴がまとめてあります。清盛は、永暦元年(1160)に初めて登場します。

『公卿補任』の、仁安2年(1167)の項をみると、以下のように記されています。

「太政大臣 従一位 平清盛 五十 二月十一日任。」

当時書かれた日記も、貴重な史料となります。日記は、歴代の天皇や上流貴族、また弁官などの朝廷の実務を担当した官僚が残しています。その反面、平氏などの武士には、日記を記した形跡が無いようです。

日記の主な内容は、当時の政務であった儀式の次第や作法ですが、政治上の大事件も記されています。次に紹介する『玉葉』『兵範記』を始めとする日記史料からは、清盛や10年にわたる源平合戦の様子をうかがうことができます。

## ◆玉葉【ぎょくよう】

記主：九条兼実（1149-1207）  
記録期間：長寛2年（1164）-建仁3年（1203）



『玉葉』は、平安末から鎌倉時代初期の公卿であった九条兼実の日記です。『玉海』と呼ばれることもあり、「大日本史」には『玉海』の名前で記されています。自筆本は現存しませんが、宮内庁書陵部にある九条家本五十巻が、最善本であるといわれています。この『玉葉』には、清盛の死に際して、その一生に触れ、人物について評している部分があります。

『玉葉』の、治承5年（1181）閏2月5日の項に、次の記述をみることができます。

「準三后入道前太政大臣清盛（法名静海）は、累葉武士の家に生まれ、勇名世に被ぶり、平治の乱逆以後、天下の権、偏にかれの私門にあり。長女は始め妻後に備はり、続いて国母たり。次女兩人、共に執政の家室たり。長嫡重盛、次男宗盛、或は丞相に昇り、或は將軍を帯ぶ。次の二子息、昇進心を恣にす。凡そ過分の榮幸、古今に冠絶するものか。就中（なかんずく）去々年以降、強大の威勢海内に満ち、苛酷の刑罰、天下に普し。遂に衆庶の怨氣天に答へ、四方の匈奴（きょうど）変をなす。何に況んや、天台法相の仏を魔滅するをや。只に仏像堂舎を湮滅するのみにあらず、顕密の正教、悉く灰燼となり、師跡相承の口決抄出、諸宗の深義、秘密の奥旨、併しながら回祿に遭ふ。かくの如き逆罪、かれの唇吻にあらざるはなし。情（つらつら）修因果の理を案ずるに、敵軍のためにその身を亡し、首を戈鋒に懸けられ、骸を戦場に曝すべし。弓矢刀劍の難を免かれ、病席に命を終ふ。誠に宿運の貴き、人意の測る所にあらざるか。但し神罰冥罰の条、新に以て知るべし。日月地に墮ちず、爰にして憑みあるものか。この後天下の安否、只伊勢太神宮、春日大明神に任せ奉るのみ。」

（『訓読玉葉 5』九条兼実原著 高橋貞一著 高科書店より）

内容は、「戦場で敵に討たれて死ぬべきであったのに、病没した。神仏の罰はてきめんだ。」など、清盛の悪行と悪口を書き連ねたものです。

兼実は、文治2年（1186）に摂政となるまでは、時の政権からは距離を保ち、政治や社会状況を客観的、批判的な目で日記に記していたようです。

## ◆兵範記【ひょうはんき】

記主：平信範（1112-87）  
桓武平氏高棟王流の出身。  
記録期間：天承2年（1132）-元暦元年（1184）

記主の平信範が承安3年（1173）に兵部卿に任じられたことから、兵部卿と信範の一字ずつをとって『兵範記』とよばれています。このほかに、『人車記』『平信記』『平兵部記』『平洞記』などの異名があります。

政情・朝廷儀礼だけでなく、撰関家の家政に関する詳細な記述は、平安後期の重要史料として位置づけられています。

### 日記の家

清盛は桓武平氏高望王流です。高望王流は、武門の家として知られていますが、『兵範記』を著した、平信範の高棟王流は、蔵人・弁官など、朝廷の実務官僚を輩出しており、撰関家の家司として家政の記録を代々記録したことから「日記の家」と称されていたようです。

中世の貴族の日記としては、このほかに、以下の史料があります。

### 『山槐記』（藤原（中山）忠親）

仁平元年（1151）から建久5年（1194）までの記録。

忠親の家号「中山」と、大臣の意の「槐」から『山槐記』と通称されます。別称に、『忠親卿記』『深山記』『達幸記』『貴嶺記』があります。権大納言や内大臣など朝廷の要職を歴任し、平氏一門とも親しい間柄であったことから、関連記事を多く記しています。

### 『吉記』（藤原（吉田）経房）

仁安元年（1166）から建久9年（1198）までの記録。

経房の別邸が、京都の東郊吉田にあったため、「吉田権中納言」と呼ばれたことから、『吉記』と通称されます。安徳天皇の蔵人頭や、高倉天皇の院別当などを務めた官人で、治承・寿永期の記録を多く残しています。

### 『中右記』（藤原宗忠）

寛治元年（1087）から保延4年（1138）までの記録。

宗忠が、家の名「中御門」から、中御門右大臣と称されたことから『中右記』と通称されています。王朝の貴族社会の年中行事や仏神事の記録や故実を主な記事とし、後世に『有職故実』の典拠として重用されました。

日記史料のほかにも、史論『愚管抄』（慈円）、説話集『古事談』（源顕兼）、『十訓抄』（作者不詳）などに清盛に関する記述が見ることができます。

## 中世の史料を読むために参考となる資料

- 『日記で読む日本中世史』（元木泰雄編著 松蘭斉編著 ミネルヴァ書房 2011.11）
- 『古記録と日記 上』（山中裕編 思文閣出版 1993.1）
- 『日本史史料 2 中世』（歴史学研究会編 岩波書店 1998.3）
- 『文献でたどる日本史の見取り図』（瀧音能之著 青春出版社 2004）
- 雑誌『歴史読本／別冊 14-22（特集「日本歴史「古記録」総覧」）』（新人物往来社 1989.11）

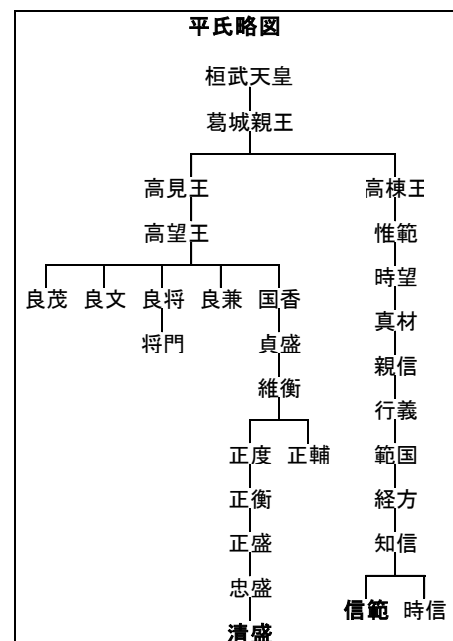
## 2 平氏と源氏

### ◆平氏と源氏の系統

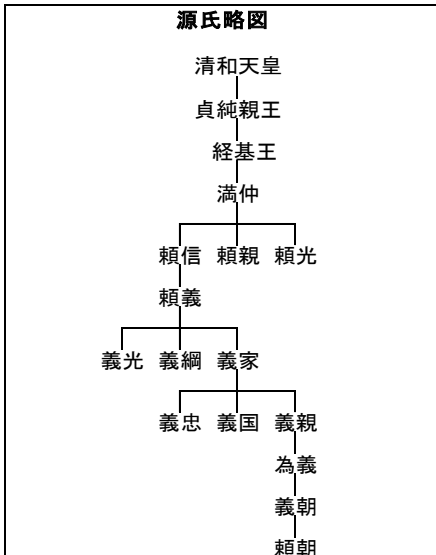
平安時代の前期、国家の財政が窮迫していたことから、経費削減のため、皇族をその身分から離れさせ、姓を与えて臣下とする臣籍降下（しんせきこうか）が盛んに行われていました。

平氏も、この皇親賜姓により、桓武天皇の皇孫高棟王に平姓が与えられたことから誕生しました。

平姓には、いくつかの系統がありますが、清盛の系統は、寛平元年（889）に、桓武天皇の曾孫、高望王が平姓を賜ったことから始まります。この系統は高望流と呼ばれ、武門の家として栄えることとなります。



(『戦乱の日本史「合戦と人物」 3』より)



(『戦乱の日本史「合戦と人物」 3』より)

一方の源氏は、桓武天皇の数代先、第56代清和天皇の皇孫、経基王が源氏の姓を与えられたことから始まりました。

中世を舞台に繰り広げられた、源平の争乱を演じる平氏と源氏の両氏は、もとをたどってみると、同じく天皇の系譜にたどりつきます。



### ◆清盛と源平合戦

平氏は、天皇の子孫の流れを汲んでいましたが、数代の間は受領にとどまり、宮中への昇殿も許されていませんでした。有力な武士であったとはいえ平氏が、なぜ朝廷の政治の中心へ進出することができたのか。そこには清盛の祖父正盛と、父忠盛の存在がありました。

祖父、正盛は白河上皇に仕え、海賊追捕や寺院の造寺造塔事業により名をあげました。父、忠盛も白河上皇に仕えたのち、ひきつづき鳥羽上皇の寵をえて、内昇殿を許されます。天皇の住まいである清涼殿の殿上間に昇るのを許される殿上人となり、天皇の側近となる榮譽を得ることになりました。

清盛は、父忠盛が内昇殿を許されたことや、鳥羽上皇の引き立てによって、異例の出世を遂げていきます。

### 平清盛略年譜

元号	西暦	年齢	年譜
元永1	1118	1	平忠盛の長男として出生。
大治4	1129	12	1月、従五位下に叙す。
長承1	1132	15	3月、父忠盛、内昇殿を許される。
保延1	1135	18	8月、父忠盛の功により、従四位下に叙す。
久安2	1146	29	2月、正四位下に叙す。また安芸守に任ず。
仁平3	1153	36	1月、父忠盛死去(58歳)
保元1	1156	39	7月、保元の乱おこる。
平治1	1159	42	12月、平治の乱おこる。
永暦1	1160	43	8月、安芸厳島社に初めて参詣。
長寛2	1164	47	9月、一族とともに法華経を書写し、安芸厳島社に奉納。
仁安1	1166	49	11月、内大臣に任ず。
2	1167	50	2月、太政大臣従一位となる。
3	1168	51	2月、清盛、病により出家。
承安1	1171	54	12月、娘徳子入内。
治承4	1180	63	5月、宇治橋の合戦【源氏敗北】
			6月、福原遷都。
			8月、石橋山の合戦【源氏敗北】
			10月、富士川の合戦【平家敗北】
11月、京都に還都。			
治承5	1181	64	閏2月4日、清盛死去。
寿永2	1183		3月、墨俣川の合戦【源氏敗北】
			5月、俱利伽羅峠の合戦【平家敗北】
元暦1	1184		閏10月、水島の合戦【源氏敗北】
			2月、一の谷の合戦【平家敗北】
元暦2	1185		2月、屋島の合戦【平家敗北】
			3月、壇ノ浦の合戦【平家敗北・平家潰滅】

(『平清盛 権勢の政治家と激動の歴史』より)

このようにして、武門出身の清盛が、初めて公卿となり太政大臣まで昇りつめる、平家全盛の足がかりが築かれました。

左記の年譜は、平清盛の略年譜に、『平家物語』に描かれている、主な源平合戦を書き加えたものです。平氏と源氏は、保元の乱・平治の乱により、本格的な争乱に突入します。

保元の乱は、保元元年(1156)7月11日夜から戦いが始まり、翌日の昼すぎには勝敗が決した都を舞台とした初めての争いで、天皇と上皇方に、

源平双方が敵味方に分かれて戦った分裂戦でした。

つづく平治の乱は、平治元年（1159）12月9日、藤原信頼と信西の権力争いに始まりました。保元の乱の勝利者側の源義朝と平清盛が互いに争い、信西についた平清盛が勝利しました。平治の乱の勝利により、これ以降20年間、「此の一門にあらざらむ人は皆人非人なるべし」と称される、平家全盛が続きます。しかし、平氏の奢りと清盛の政務に対し、しだいに反平氏の動きが高まり、治承4年（1180）には、以仁王が平家追討の令旨を発した宇治橋の合戦が起こりました。宇治橋の合戦は、源氏の敗戦となりましたが、この時発せられた令旨が東国の源氏に、平家追討を促すことになりました。

以仁王の乱の翌月、清盛は福原へ遷都します。しかし、造都が遅々として進まず、11月には京都へと都を戻すことになりました。この間にも、源平の争いは続き、8月には、源頼朝が、伊豆で挙兵し、石橋山の合戦が起こります。石橋山の合戦では頼朝は敗北し平氏は勝利しますが、この後、頼朝のもとに東国武士が集まり、10月に起こった富士川の合戦では、平氏が大敗します。

平家打倒の動きはますます加速し、治承5年（1181）閏2月4日、清盛が死亡すると、その後四年足らずで、元暦2年（1185）3月、壇ノ浦の合戦により、平氏一門は滅亡したのです。

### 以仁王の令旨

以仁王は、治承3年（1179）、平清盛のクーデターにより、父の後白河法皇が幽閉され、自身の皇位継承の望みも断たれました。このできごとにより、平氏に恨みをもった以仁王は、源頼政の勧めに従って、平氏追討の令旨を発しました。

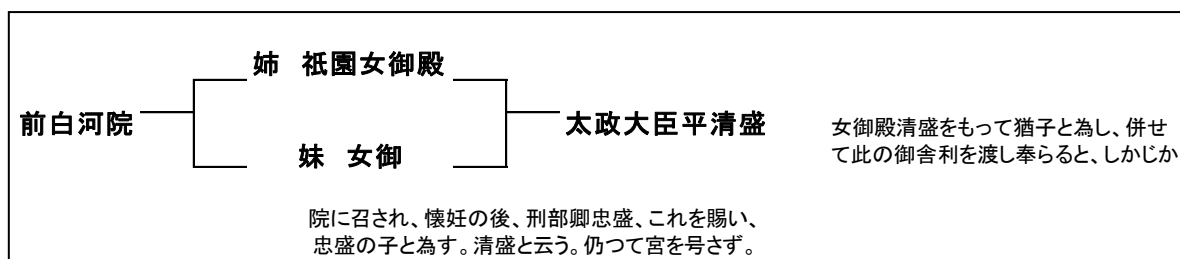
自らを最勝王と称し、天武天皇になぞらえて「勅」であるとしたもので、「應早追討清盛法師並従類叛逆輩事」として、平氏の悪行を羅列したのち、平氏追討を催促しています。

以仁王の令旨は、『吾妻鏡』などに全文が掲載されています。

## 3 清盛落胤説

清盛の出生については、『平家物語』に、清盛の父は忠盛ではなく、白河法王と祇園女御の間に儲けられた子であると記されていたり、『今鏡』に、白河法皇の落胤であるという記述を見ることができたり、諸説あります。

以下は、大正元年（1912）に、滋賀県の胡宮神社から発見された「仏舍利相承系図」を訳したものです。文暦2年（1235）7月の日付があり、祇園女御の妹が寵愛を受けて男児を儲け、その死後に、祇園女御が猶子としたことなどが記されています。



（『平家納経の世界』より）

清盛の祖父と父が白河上皇のそばに仕えていたことや、清盛が武家の出でありながら、太政大臣にまでなった異例の出世とが結びつけられ、この「落胤説」が生まれたと思われませんが、清盛出生については謎のままとなっています。



## 4 平家物語の世界

『平家物語』は、治承4年(1180)から元暦元年(1184)の源平合戦の描写を主として、その前後の平家一門の興隆・滅亡を記したもので、戦記文学とされ、『保元物語』『平治物語』『承久記』とともに「四部合戦状」といわれています。

異本が多く派生し、主に、「語り本系」「読み物系」の二つに分類されています。「語り本系」は、琵琶法師の語りの台本であったと考えられ、「読み物系」は、始めから読むために作られたものであると考えられています。

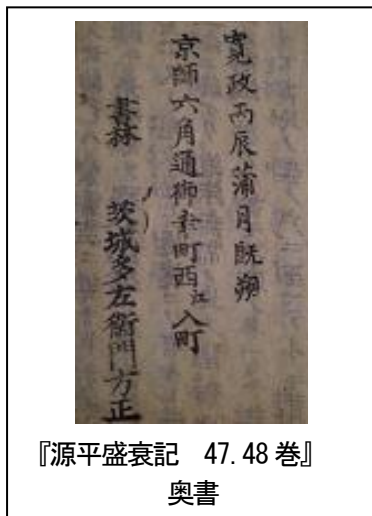
### ◆埼玉県立熊谷図書館蔵の源平盛衰記【げんぺいじょうすいき】

『源平盛衰記』も数ある異本のひとつであるとされ、「読み物系」に分類されています。成立は14世紀頃と考えられています。治承から寿永年間(1177-84)の源平争乱の過程の記事を編年体で著したもので、平家断絶「六代誅(きられ)」の記事がないことが特徴で、平家諸本の中で最も大部のものです。

埼玉県立熊谷図書館では、『源平盛衰記』(寛政8年(1796)刊)を所蔵しています。

#### 【書誌の情報】

タイトル：『源平盛衰記』  
48巻24冊／目録あり。 全25冊  
大きさ：縦26cm



47.48巻の奥書に、以下の通り記されています。

「寛政丙辰蒲月既朔  
京師 六角通御幸町西江入町  
書林 茨城多左衛門方正」

※「寛政丙辰」は寛政8年(1796)のことをいいます。

茨城多左衛門については、『徳川時代出版者出版物集覧』に、以下の記述があります。

「小川多左工門(茨木(城)氏)小河屋 柳枝軒 初代方淑 二代信清(方道)」



『源平盛衰記 1.2巻・目録』表紙



『源平盛衰記 1.2巻』冒頭部分

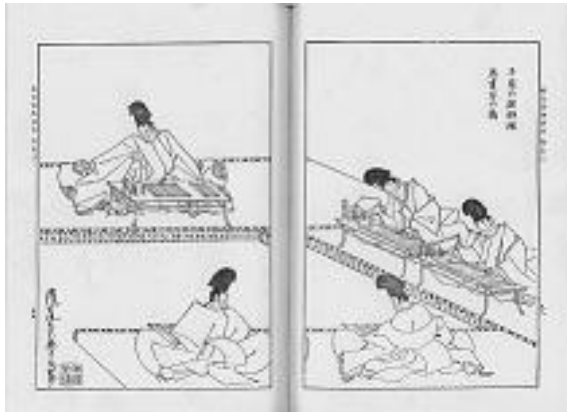
## 5 平清盛と信仰 — 平家納経 —

広島県の厳島神社に、長寛2年（1164）9月、平清盛が平家一門のさらなる繁栄を祈願して奉納した經典群、国宝「平家納経」が伝わっています。

平家納経は、清盛の発願によって、兄弟、子息など平家の一門32人が結縁して、書写を行った一品経であるといわれています。納められた経巻は、軸には水晶が使われ、表裏には金銀の箔がふんだんに使われるなど、それぞれが趣向を凝らした作りとなっており、当時の贅を尽くした絢爛豪華なものとなっています。

（\*結縁とは「仏法との関係を結んで、未来に成仏するためのきっかけを作ること」

『岩波仏教辞典 第2版』より）



「平家の諸卿経 巻書写の図」

（『芸州厳島名所図会 下巻』より）

平清盛が安芸守であった時期に、高野山大塔の建設事業を行いました。この建立中に清盛はある夢をみたといえます。

「ある夜の夢に、香染の衣をまとった老僧が現れて語るには、「日本国の大日如来は伊勢大神宮と厳島である。（中略）お前はたまたま安芸の国司となっている。速やかに厳島神社に奉仕すべきである。」（『平清盛小事典』より）

その後、厳島神社への信仰を始めた平清盛は、またたく間に昇進を重ね、太政大臣まで昇りつめることになりました。

### 尽善尽美

清盛「願文」の一文に、「尽善尽美」という一文があります。善とは仏教でいう善根（果報をもたらすよい行い）のことをいい、「善根・美しい限りを尽くす」の意で、平安貴族の常套句として使われた言葉のようです。

### 一品経

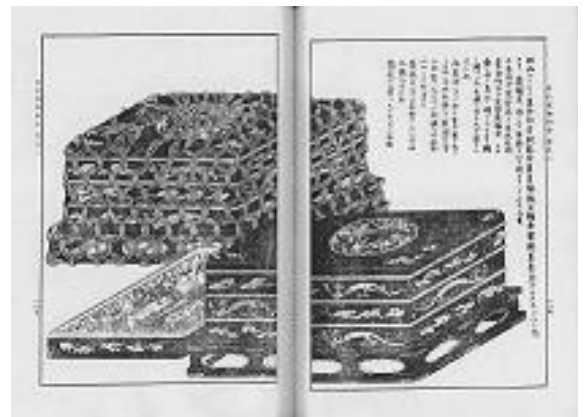
一品経とは、「法華経 28 品を各 1 巻ずつ 28 巻に書写した経」のことをいいます。

法華経の書写の中でも、最も丁寧な方法といわれ、追善供養などに用いる場合は、縁者が結縁して、各品を分担書写することが多くあります。

「平家納経」のほかに、慈光寺経（埼玉県比企郡 慈光寺蔵）などがあります。

（『国史大辞典』より）

なぜ、厳島神社が清盛の信仰の対象となったのかについては、諸説があるようですが、知られているものに、『古事談』や『平家物語』の「大塔建立」などに登場する、夢告げ話があります。「平家納経」には、平清盛の名で奉納の由来を記した「願文」が添えられていますが、この夢告げ話についても書き記されています。



「平清盛公寄附法華経辛櫃」

（『芸州厳島名所図会 下巻』より）

## より詳しく知りたい方へ

### ～県立図書館にある今回の展示資料～

※『書名』著者名 発行者 出版年 所蔵館【県立図書館の請求記号】帯出区分

※以下に掲載した資料は、県立熊谷図書館2階ロビーで5月24日まで展示中です。



#### ◆中世の史料

『訓読玉葉 5 卷第三十六-卷第四十二』

(九条兼実原著 高橋貞一著 高科書店 1989) 【210.42/㍻】

『玉葉 第2 卷23 (安元3年) - 卷39 (寿永2年)』

(藤原兼実著 今泉定介編 国書刊行会 1906) 【1210.4/㍻】

『古記録入門』(高橋秀樹著 東京堂出版 2005.11) 【210.029/㍻】

『兵範記 1-3』(平信範著 上横手雅敬編集・解説 思文閣出版 1988-1990) 【210.38/㍻】

『史料大成 兵範記 増補 1-5』(増補史料大成刊行会編 臨川書店 1965) 【210.088/㍻】

『日記の家 中世国家の記録組織』(松蘭斉著 吉川弘文館 1997.8) 【210.4/㍻】

『国史大系 9 公卿補任』(経済雑誌社編 経済雑誌社 1899) 【210.08/㍻】

雑誌『歴史読本 723号 (特集 歴史記録への招待⑰『玉葉』)』(新人物往来社 2000.5)

雑誌『史学雑誌 114-1 (特集 玉葉の「物議」と「時義」-本文復原への一試行)』

(史学会 2005.1)

雑誌『日本歴史 676 (特集 研究余録 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵『兵範記』について)』

(吉川弘文館 2004.9)

#### ◆中世の史料を読むために

『日記で読む日本中世史』(元木泰雄編著 松蘭斉編著 ミネルヴァ書房 2011.11) 【210.4/㍻】

『古記録と日記 上』(山中裕編 思文閣出版 1993.1) 【210.36/㍻】

『日本史史料 2 中世』(歴史学研究会編 岩波書店 1998.3) 【210.088/㍻】

『文献でたどる日本史の見取り図』(瀧音能之著 青春出版社 2004) 【210.088/㍻】

雑誌『歴史読本/別冊 14-22 (特集「日本歴史「古記録」総覧)』(新人物往来社 1989.11)

#### ◆平氏と源氏

『源平時代人物関係写真集 清盛 頼朝 義経 義仲』

(志村有弘解説・撮影 勉誠社 1998) 【210.38/㍻】

『人物探訪・日本の歴史 3 平氏と源氏』(暁教育図書 1975) 【D210.1/㍻】

『平氏政権の研究 思文閣史学叢書』(田中文英著 思文閣出版 1994) 【210.39/㍻】

『平家の群像 物語から史実へ 岩波新書 新赤版 1212』

(高橋昌明著 岩波書店 2009) 【210.39/㍻】





- 雑誌『歴史研究 460 (特集 平家一族の謎)』(新人物往来社 1998. 3)  
雑誌『歴史研究 442 (特集 源氏一族の謎)』(新人物往来社 1999. 9)  
雑誌『歴史と旅 7-10 (特集 武門平氏の系譜と姓氏)』  
(秋田書店 1980. 9)  
雑誌『歴史と旅 7-5 (特集 武門源氏の系譜と姓氏)』(秋田書店 1980. 4)

### ◆清盛と源平合戦

- 『清盛以前 伊勢平氏の興隆 平凡社選書 85』(高橋昌明著 平凡社 1984)【210. 38/キ/】  
『平清盛 人物叢書 新装版』(五味文彦著 吉川弘文館 1999)【289. 1/㍻1 003/】  
『平清盛 権勢の政治家と激動の歴史 センチュリーブックス』  
(安田元久著 清水書院 1971)【289/㍻/】  
『変貌する清盛 『平家物語』を書きかえる 歴史文化ライブラリー 315』  
(樋口大祐著 吉川弘文館 2011)【289. 1/㍻1 003/】  
『天皇の歴史 4 天皇と中世の武家』(講談社 2011)【288. 41/㍻ン/】  
『源平の内乱と公武政権 日本中世の歴史 3』(川合康著 吉川弘文館 2009)【210. 39/㍻ン/】  
『源平合戦とその時代 特別展』(香川県歴史博物館編 香川県歴史博物館 2003)【210. 39/㍻ン/】  
『戦乱の日本史「合戦と人物」 3 源平の争乱』(第一法規出版 1988)【D210. 1/㍻/】  
『源平争乱と平家物語 角川選書 322』(上横手雅敬著 角川書店 2001)【210. 38/㍻ン/】  
  
雑誌『月刊考古学ジャーナル 591 (特集 日宋貿易と平家物語)』  
(ニューサイエンス社 2009. 10)  
雑誌『歴史と旅 6-2 (特集 源平合戦大特集)』(秋田書店 1979. 2)  
雑誌『歴史と旅 25-9 (特集 源平盛衰三十年戦争)』(秋田書店 1998. 6)

### ◆以仁王の令旨

- 『吾妻鏡 吉川本 1』(広谷国書刊行会 1929)【210. 4/A99】  
『日本中世の政治と文化 豊田武博士古稀記念』  
(豊田武〔著〕 豊田武先生古稀記念会編 吉川弘文館 1980)【210. 4/ニ/】  
『日本の中世国家 日本歴史叢書』(佐藤進一著 岩波書店 1983)【210. 4/㍻】

### ◆清盛落胤説

- 『国史大系 60 下 尊卑分脈』(黒板勝美国史大系編修会編 吉川弘文館 1962)【210. 08/コ/】  
『日本を創った人びと 6 平清盛』(日本文化の会編集 平凡社 1979)【281. 08/ニ/】  
『古寺巡礼京都 25 六波羅蜜寺』(淡交社 1978)  
雑誌『國學院雑誌 97-3 (特集『平家物語』の伝える清盛出生をめぐって)』(國學院大學 1996. 3)  
雑誌『歴史研究 319 (特集 平清盛の謎)』(新人物往来社 1987. 11)

### ◆平家物語の世界

- 『源平盛衰記 巻第 1. 2』(京師 茨城多左衛門 1796 (寛政 8))【藜 913. 43/㍻】  
『源平盛衰記 巻第 47. 48』(京師 茨城多左衛門 1796 (寛政 8))【藜 913. 43/㍻】  
『源平盛衰記 目録』(京師 茨城多左衛門 1796 (寛政 8))【藜 913. 43/㍻】  
『有朋堂文庫 [16] 源平盛衰記』(塚本哲三編 有朋堂書店 1929)【081/㍻/】  
『改定史籍集覧 編外 3 参考源平盛衰記』(近藤瓶城編 近藤活版所 1901)【210. 08/Sh89/】

『徳川時代出版者出版物集覧』(矢島玄亮著 万葉堂書店 1976)【R025.1/ヤ/】  
 『平家物語と琵琶法師』(むしやこうじ・みのる著 淡路書房新社 1957)【BM913/ム/】  
 『平家物語絵巻紀行 林原美術館所蔵』(宮坂靖彦著 中国新聞社 1993)【291.09/ミ/】  
 『有朋堂文庫 [14] 保元物語・平治物語』(塚本哲三編 有朋堂書店 1927)【081/ユ/】  
 『国史叢書 42 承久記』(矢野太郎編 万葉堂書店 1917)【210.08/Ko53/】  
 雑誌『國學院雑誌 103-5 (特集 源平盛衰記の語り)』(國學院大學 2002.5)  
 雑誌『別冊太陽 日本のころ 13 (特集 平家物語絵巻)』(平凡社 1975.11)  
 雑誌『サライ 21-7 (特集『平家物語』の教え)』(小学館 2009.4.2)  
 雑誌『旅 76-11 (特集 「平家物語絵巻」に描かれた熊野)』(JTB 2002.11)

## ◆平清盛と信仰

『平家納経の研究 [3] 図録編』(小松茂美著 講談社 1976)【D183/Ko61/】  
 『平家納経の世界』(小松茂美著 中央公論社 1995.12)【B186.7/へ/】  
 『芸州巖島名所図会 下』(日本資料刊行会 1975)【R291.76/ゲ/】  
 『巖島神社千四百年の歴史 世界遺産登録記念～ハイビジョンセミナー「巖島神社」から～』  
 (NHK広島放送局 1997.12)【175.976/イツ/】  
 『巖島信仰事典 神仏信仰事典シリーズ 8』(野坂元良編 戎光祥出版 2002.11)【175.976/イツ/】  
 『日本の中世を歩く 遺跡を訪ね、史料を読む 岩波新書 新赤版 1180』  
 (五味文彦著 岩波書店 2009)【210.4/ニホ/】  
 雑誌『論座 85 (特集 連続対談 空間の行間 第9回巖島神社と『平家物語』)』  
 (朝日新聞社 2002.6)

※今回展示はしていませんが、『Lib Letter 27号』を作成する上で、以下の資料も参考としました。

『国史大辞典』(国史大辞典編集委員会編 吉川弘文館)【R210.03/コ/】  
 『平清盛小事典 平家物語の真実』(歴史と文学の会編 勉誠出版 2011)【289.1/タイ003/】  
 『平清盛福原の夢 講談社選書メチエ 400』(高橋昌明著 講談社 2007)【289.1/タイ003/】

雑誌『別冊太陽 190 (特集 王朝への挑戦 平清盛)』(平凡社 2011.11)

『源平盛衰記の基礎的研究 研究叢書 328』  
 (岡田三津子著 和泉書院 2005)【久 913.434/ホ 136/】  
 『平家物語の怪 能で読み解く源平盛衰記』  
 (井沢元彦著 世界文化社 1999)【久 913.434/イ 005/】



※刊行後2年を経過した雑誌は貸出しができません。2012年現在、2009年以前の雑誌は貸出不可です。

※大正期以前に刊行された図書は貸出しができません。

上記以外にも、県立図書館では平清盛や源平合戦に関する資料を所蔵しております。  
 お探しの資料がございましたら、お気軽にお問い合わせください。